

# 私

は言葉というものが好きで、海辺を散歩する人が波に濡れたきれいな小石を拾うような感覚で、ひとつずつ集めていくようにしている。名言とされるものではなく、他の人なら何とも思わない、ごく普通の言葉がなぜか心と耳をくすぐり、面白く感じる。そんな言葉にはいつまでも出会った頃の記憶が染み付いている。家に持ち帰った小石を、ガラスの鉢に沈め、飾ったとしても、ずっと海辺のものでありつづけるのと同じように。

先日、宴会の席でまたひとつの言葉を拾った。「私」という耳慣れた言葉が、日本語を最近勉強し始めた人の口から、はっとするようない響きで届いた。彼は「私」を「ワタジ」と発音していた。操れる語彙はまだあまり多くはない

のだが、大変饒舌で、内容もとても面白かったのだが、何よりも彼の話し方自体に好感がもてた。東京ではもちろん、どんな地方を回ってもこんな抑揚と、踊るようなリズムにのせられた日本語は、なかなか耳にできないだろう。他人が真似しようとしても真似できない彼独自の日本語に、しきりに連発される彼独自の「私」に、私は何ともいえない温かみを感じた。また最近久しぶりに訪れた京都で、今度は英語の言葉を拾った。昔住んでいた家を出て駅に向かう途中、トンネルの壁にNO RULEという緑色のペンキの落書きがあり、その二番目のRがその上から白いペンキでLに訂正されていた。几帳面な誰かが後から直したのだろう。ちゃんとNO RULEとなるように。

RをLに訂正しても、やはり緑色のRが白いペンキの下ではつきりと自己主張している。緑のNO RULEは、言葉の意味通り綴りの規則を無視した、英語の表現になっていた。後からスペルを訂正した人も、考えてみると「落書き禁止」という規則を無視している。訂正を施したというより、この人も落書きの共犯である。

緑と白の落書きは、まるで二人の他人が共作した詩のようなものだと思つた。☺

# NO RULE

マイケル エメリック  
Michael Emmerich  
翻訳家・日本文学研究者